

その他

戦時中ルソン島の在留邦人の記

東京都 六戸善作

昭和六年四月、二十二歳のとき、私は夢を抱いて、当時アメリカ領であったフィリピンのルソン島、マニラ市へとやってきた。氷小屋のボーイをふり出しに、二年後の昭和八年には、ミンドロ島のスマギ木材会社で働いていた。ここで、マギヤン族という、現地住民が作っていたすばらしい綿花をみて、私はルソン島で、綿花栽培と熱帯農業の研究を思いたち、マニラ市の栄月旅館で鍋田豊吉翁（和歌山県出身で、すでに、カリフォルニアで花卉栽培に成功し、日本に引揚げていた

人）に出会い、比国農林省殖産局長のヘラリオン・シラヤン氏とガパン町の大地主フリオ・バルモンテ氏の知遇を得て、同氏所有のサンアトニオの土地に綿花を主体として熱帯農業の研究に取り組み、昭和十五年には、リサール州のマリキーナ農場で、日本西瓜大和（やまと）クリームの栽培に成功、一時日本に帰国し、結婚再渡航し、昭和十六年には、モンテンルパの新農場で大々的に西瓜や高級野菜類の栽培をし、クリスマス、正月に収穫、出荷をたのしみに行っていた目前、十二月八日に日本はアメリカと戦争をした。収穫皆無、私はモンテンルパの刑務所に収容され、妻と長女は、マニラの日本倶楽部で軟禁生活となる。

十七年一月二日に日本軍はマニラに入城し、私たちは解放され、日本人はすべて、日本軍に協力すること

になった。私は比島方面軍野戦貨物廠の囑託となり、モンテンルバの地に四十ヘクタールの軍農場をつくり、主任となって働いた。

十八年には糧食統制会社（食糧軍納会社）の新設で、生産指導員として迎えられ、十一月、現地召集兵の第一号として、陸軍二等兵として入隊、十二月、ブラカン州のプストスに軍直営の野菜類採種農場設営で農場長（陸軍二等兵）となり、家族同伴を許され、昭和二十年一月、北部ルソンのバンバン町バラットに軍農場長として赴任、バレテ峠の前線に新鮮な野菜を供給していた。

昭和二十年五月下旬、北ルソンの入口の要塞バレテ峠とサラクサク峠が米軍に突破されるにおよんで、六月初旬、農場撤退の軍命令で、農場勤務の軍囑託四人と私たち一家（妻と四歳の長女、二歳の長男、生後二か月半の双生児）の計十人は、これから長い苦難の敗走が始まる。

この頃、マニラ市を中心として中部ルソン在住の邦人は、十九年十二月以降、総領事館と日本人会の保護

のもとに、北ルソンのバヨンボン、ボンハル、ソラノと移動しながら、集団生活をしてきたが、前記二つの峠が米軍に破られたため、ルソン山中への逃避行となったのである。

私たち農場勤務者は、軍命令で出発は六月六日深夜、軍貨物廠撤退のしんがりとなり、敗走に入った。

これより先、五月末のある日、貨物廠舎の岩倉大佐に私は呼ばれた。貨物廠本部のバラット撤退計画を打ち明けられ、「貨物廠最後の撤退は六月六日の夜とする。君には気の毒だが、君は部落民を広場に集めて、のど自慢パーティーのようなものを開いてもらいたい。酒は隊本部から出す。住民が家を留守にしてパーティーを楽しんでいる間に、彼らの水牛と牛車を徴発し、これに軍の物資を積んで、ひそかに脱出する。君たち十人は、そのあと十二時すぎに農場を出発してほしい。住民はこれまで、よくわれわれに協力してくれて、申しわけないが、背に腹はかえられない。この計画は、住民から信頼されている君の協力なくてはできない。力を行使すれば悲惨な結末になろう。心を鬼に

してほしい」私はうなづくばかりはなかった。

大佐の目も、私の目もぬれていた。

農場を出て間もなく、無性に体がだるく、高発熱、マラリヤが再発したらしい。意識がもうろうとする。

ランタップに着いた時には、高熱はげしく、体は衰弱し、気分は悪くなり、これが最後のような気がして、高熱の中で、妻に「僕はもう駄目だよ、子どもたちをたのむ」とうわ言のように言っていたというが、幸運だったのは、貨物廠本部の医務室が前日にこのランタップに移ってきていた。医務室のベッドに移され、キニーネの注射などで、やがて回復してきた。

六月九日の午後であったか、本部からの緊急命令で「ラムット川の氾濫で、流橋のおそれがあるため、部隊はただちに出發すべし」とのことである。この軍命令で、ランタップに駐留していた各部隊、車両がいっせいに動き出したので、ものすごい混雑。すぐ傍のラムット川に着いたのは夕方近くだった。

川はすでに濁流がうず巻き、橋げたを洗っていた。

流失寸前だ。

私は幼な子四人を連れて川を渡り、つづいて囑託らがそれぞれの私物や食料を運び、そのあと、二回ほど折り返して荷物を運んだが、車の中にはまだ食料が残っていた。危険なので、取りに行くのをやめたが、江上囑託はあきらめきれず、もう一度と橋の中ほどまで行ったとき、橋げたが向こう側からくずれ、つぎつぎと人波は流れ流されるので、アワを食って逃げて帰ってきた。実に危機一髪であった。近くに小屋があったので、荷物を運び、一息入れた。雨のため、米機の来襲がなかったので、それだけはたすかった。

六月十日早朝、川がどうなっているのか、私は流失した橋の少し上流に行き、対岸をながめた。対岸には、橋を渡れなかった多数の軍人がいた。それらの兵隊は、ふんどし一つで軍刀や荷物を背負い、濁流の中を、川を渡って、こちらにこようとしている。が、川の流れは速く、あつという間に渦にのまれ、見えなくなってしまう。このようなことが昨夜からずっと続いているのだろうか。

兵隊がひとり、斜めに流されながら岸にたどり着い

た。近寄って言葉をかけたが、狂っており、わけのわからぬことをさげびながら、ふんどし一つで、踊るように遠ざかっていった。

やがて、米軍機がやってきて、ものすごい機銃掃射がはじまった。そして今度は迫撃砲弾がとんできた。むちゃくちゃに弾丸が炸裂した。生きた心地はなく、顔面蒼白である。

砲声はやみ、みんな集まってきた。「これからどうするか」「こんな危ない所にはおれない、各自本隊を追っていこう」ということになり、持ってきた荷物、食料を持てるだけ持っていくことにしたが、私は病後でもあり、幼な児四人をかかえては、どうにもならず、とにかく小屋で休み、体力の回復を待つことにした。自分たちだけになると、みんなから置いてけぼりをくったようで淋しく、胸にせまるものがあつた。翌日も次の日も米軍機の機銃掃射と砲撃は間断なくつづけられたが、さいわいに当たらなかつた。

午後、人の気配を感じた。小屋の覆いの上から声がした。日本語で「子どもの声でしたが、在留邦人です

か」という。安心して顔を出したら、大尉の階級章をつけた将校が立っていた。

「あなたは農場の宍戸さんではないですか」と私の顔をじつと見つめて言った。私はおぼえがなかつたが、バラットを通過するときに野菜を恵んでもらつた者だと言つた。

「どうしてこんなところにおられるのか」と言われ、「私はごらんの通り、幼児四人を抱え、体力も疲れはて、家族全員が自決する覚悟です」と話したら、大尉は「そんなばかなことを」と言われ、「子どもが元気であるではありませんか」とこんなことと私を論じ、彼は「私に良い考えがある」と言つて出ていかれた。

やがて大尉は、水牛を一頭引っぱつてこられ、「夕方に米機がこなくなつたら、牛に荷を乗せて出発なさい」と言つて、足早に立ち去つた。夕方、水牛に荷を載せて、家族六人の逃避行が始まつた。

妻は双生児二人を背負い、長女（四歳）の手を引き、私は背負つた荷物の上に長男（二歳）を肩車にして、水牛を引き、月明下、人家のない草原を水牛の歩みに

あわせて歩いた。

深夜、長女厚子はさすがに疲れ、「お父ちゃん、こんど行く家はまだ遠いの」と聞くので、ずーっと先の方に月明かりにかすんで灯が見えたので「あの赤い灯の見える所がお家だよ、がんばろうね」と言い、夢中で歩いた。

そこに着いてみたら、兵隊たちのたき火のあとの残り火だった。「お父ちゃん、ねむいよ」とぐずる長女をなだめた。辛い行軍である。明け方近く、突然ドドーンという音と同時に、シュルシュルと迫撃砲弾が撃ちこまれてきた。水牛がおどろいてあばれ出し、背中の荷物を振りとはして、林の方に逃げ去った。

急に天候が変わり、叩きつけるような雨になった。私たちは、道路上でエンコしているトラックの下にもぐりこんだ。しゃがんでいる体の下を雨水が川になって流れた。私たちのほかに、兵隊たちも雨やどりをしていた。小降りになると、兵隊たちは出発した。雨がやみ、荷物を集めてみて、おどろいた。一番たいせつな皮製のカバンがない。カバンの中には、パスポート、

現金、貴重品のほか、ベビー用粉ミルクが入っている。先ほどの兵隊たちが持ち逃げしたにちがいない。大事な物を盗られ、落胆のあまり、前進する気にはなれず、水牛はいなくなつたし、どうにもならず、左手の竹やぶの中のバラックに落ちつくことにした。

明るくなると、米軍機は、入れ代わり立ち代わりに機銃掃射にくる。かつてここは日本軍の陣地だったらしい。私たちはなすすべもなく、小屋の中で双生児を真ん中に寝かし、それを囲み、坐りこんでいた。死なばもろとも一家六人いっしょに死にたいと思った。

米軍機が頭上にきたと思つた瞬間、長男が「あっ」と声を出して、うしろにひっくり返つた。私はとっさにやられたと思ひ、抱き起こしてみたが、出血はなく、どこもなんともない。機銃弾は、妻が坐っていた斜めうしろの竹に当たり、それ弾が妻の袖に穴をあけ、長男があぐらをかいている両足の間に突き刺さり、土をとばし当たつたのでひっくり返つたのだつた。幸運というほかない。

私たちはここに五日間いたが、毎日毎日、砲弾と機

銃掃射が休みなく続き、生きた心地はなく、前進することにしたが、またこの前進がたいへんだった。

ここまでは水牛が運んでくれたが、六人分の食料と野宿用具、衣類、ペビー用のおしめにいたるまで、すべて私一人で運ばなければならない。私は荷物を背負い、妻は双生児を背負い、右と左に四歳、二歳の手を引いて坂道を歩くのだ。川の橋はことごとくこわされておおり、ジャブジャブと水の中を歩かなければならない。荷物を一回で運ぶことはできないので、百メートルぐらい運んでは、妻と子どもたちをそこに待たせ、三回ぐらい引き返してきて運ぶ。これを何回も続ける。無理がたたって、マラリヤが再発し、体力は消耗する。夕方になると、日本軍の傷病兵がごそごそと道に出てくる。そして歩き始める。この傷病兵たちがはたして、本隊にたどり着くことができるだろうか、いくらがんばっても、けつきよくは道ばたに倒れ、野垂れ死にする運命なのだ。

ここにくるまで、道側に死んでがいたうをかぶせられていた死体を何十と見てきた私たちなのだ。私たち

一家が、いくらがんばっても、本隊に追いつくことは不可能だ。どうせ野垂れ死にするのなら、これ以上、妻子に苦しみを味あわせるのはしのびない。私自身にも残酷すぎる。重い荷物を背中に、又両手にさげて歩きながら、一家六人で自決して果てることを考え、決意して、妻に同意を求めた。

しかし、妻の答えは全く意外だった。妻はたんとんとした口調で「私は今ここで、みんなで死ぬことには反対です。あなたの苦労はよくわかりますが、ここで死んだら、それですべてが終わりです。また、生きかえることは、できないのです。あの世に行ってから、あのととき死ななかつたらな、と後悔してもあとの祭りです。死ぬのはいつでもできます。子どもたち四人はまだ元気です。自決なんて弱気を出さないでしっかりして下さい。私たちには今まで奇跡だってあったでしょう。これからだって、きつとあるかも知れません。私たちは今まで、何も悪いことをしたことはありません。神様、佛様がきつと助けて下さるかも知れません。もうすこしがんばってみましょう。あなたか私か、ど

ちらかが倒れるまで、死ぬのはそのときまでおあずけにしましう」

私はこのとき、母の、そして女の強さを電流にうたれたときのように感じた。

それにしても、私たち家族六人の苦しい行軍はいつまで続くのだろうか。私も妻の言葉で、はっと自分をとりもどし、心機一転して、がんばってはいるが、一区間を三回も折り返しての荷運びは、体力に限界があり、気力だけではどうしようもない。ファームスクールに着いた時点で、とうとうへばってしまった。しばらく道ばたに坐りこみ、今後のことを考えようとした。ふと前を見ると、すこし先の道のカーブのところの草むらに牛車のようなものが見えた。妻と行って、二人して道に引っぱり出したら、どこも故障はなく、立派に動くようだ。ありがたい、これこそ天佑だ、これがあれば子供達や荷物を車に載せて運べる。私は急に元気になった。前途に希望が湧き、天にも昇る心地とは、このことだろう。

夕方、米軍機がいなくなったあと、子ども達と荷物

を載せ、妻が後押しし、動き出した。ルソン島のイザリ勝五郎だ。さいわいに、これから先は、道路はすこし上り坂だが、平坦だし、川はないし。ところが、日中木陰に休んでいた傷病兵たちがぞろぞろと路上にはい出してきた。ファームスクールの野戦病院から撤退する患者達であろう。みんな枝にすがり、足を引きずり、血のにじんだ包帯の間からはウジが動いている。私達の牛車を見て、手をあげ、両手をあわせて頭を下げ、拝むように「車に乗せて下さい」と言う。しかし、私達も妻と二人して全力で車を押し、滝のように流れる汗を拭くこともできず、坂道を登っているのである。とても無理な話だ。心を鬼にして見過ごすほかなかった。

翌朝、私達は、サントドミンゴ山麓の貨物廠集積所に到着した。久しぶりに見る元気な二元気というより、傷病兵でないという兵隊、顔見知りの兵隊と会い、話していたら、突然、迫撃砲弾が飛んできて炸裂した。ここは今まで、一度も砲撃はなかったとのこと、「六戸さんがきたので、米軍の祝砲だろう」と言われた。

私達一家は、ラムット川を渡った地点で、自決したと伝わっていたのである。

植木中尉をはじめ、バラット時代の本部将校や下士官達が、私達一家の到着を喜んでくれ、岩倉隊長の当番兵であった森兵長は、私の長女（厚子）を抱きあげて、「アッチちゃん、アッチちゃん」と大喜びであった。

江上囑託達とも再会できた。しばし、嬉しさのひとときであった。

ここで二、三日はゆっくりと休養できると思ったが、急に移動命令がきて、キャンガンへ行くという。でも今度は、部隊の将兵といっしょだし、子供や荷物は、兵隊や江上囑託らが手伝ってくれるので、大助かりである。

キャンガンに着いたら、雨だった。民家のひさしの下に家族身を寄せて雨を避けた。野営は、町はずれにばらばらに天幕を張った。又雨が降ったので、私達は天幕代わりに毛布を雨よけにした。二隅を私と妻が持ち、二隅を木で結び、親の私達は全身びしょぬれで子供達を守った。

翌日、パクダンに向かった。もう雨季に入ったのか、雨がよく降る。パクダンに着いておどろいたのは、先発した在留邦人（老人と婦女子）がまだここにいることだった。マニラで隣組だった人達に、思いがけなくここでめぐり合った。お互いの無事を喜んだ。しかし、最後まで生き残ったのは、私達だけだった。

菅野夫人は、ご主人と前年暮にマニラで生別、三人の幼児を連れ、食料の乏しい中、強行軍でひどく衰弱しており、これからは、私達と行動を共にしたい希望をおたがいに話しあったが、彼女達は総領事館の管轄で、勝手なことは許されず、ここパクダンでの別れが最期となった。ご主人は戦死され、一家全滅したことを後に知った。

六月二十四日、バラットで、三月十日に生まれた双生児の兄（善穂）が死んだ。生まれて三か月のはかない命だった。私が本部に連絡に行っており、留守の間だった。妻と江上囑託と穴を掘って、埋葬した。バラット農場を出て、十八日目だった。

七月二十六日、部隊はパクダンを出発し、マゴック

に向かった。十二キロの道のりである。私達は、山の中腹につくられた細い小さな道を歩く。二人並んでは歩けない。片側は谷になっており、兵隊と在留邦人（老人、婦女子）は、従軍看護婦と無言で歩いている。夜はタイヤを切りさいて作ったタイヤマツで道を照らしながら歩く。数百本の火が見え隠れしながら延々と続く。この異様な光景は、なんと表現したらいいのか。正に鬼気せまる感じである。大小便は道端にしゃがみ、谷の方向に向けて排泄する。傍らを人が通るが、恥ずかしいなんて言うてはおれない。列から遅れたら最後、もう会うことはできない。キャンガン以来、サツマイモの食事だけに、軟便は道路にも溢れ、泥と汚物の中を歩く私達の姿は悲惨の極みだった。

七月四日、私は報告のため、貨物廠本部へ行き、直属上官の野末少佐に会った。少佐は私の顔をじっと見て「六戸君は覚悟をきめているようだな」と言う。「私は奇跡でも起こらない限り、死は必然でしょうが、私は最後まであきらめず、妻子と共にがんばります」と答えた。

少佐は「君に対して、今出来ることは、本部にはまだ米があるので、一週間に一度ずつ兵隊に届けさせる。がんばってほしい」と激励してくれた。

私は少佐のあたたかい言葉に感謝し、マゴックの住家にもどったところ、私の留守中に、双生児の生き残り（弟の良穂Ⅱがお）が死亡していた。善穂が死んで十日後のことである。

米軍のマゴックへの砲撃はますます激しく、谷間は、終日の砲煙で、まるで霧が立ちこめているようであった。

ある日の夕方、食料探しから戻ってきたら、江上囁託が、心配顔で立っていた。奥さんが高熱で、どうしたらよいかわからないという。

妻はもう駄目なのか、私は目の前が、真つ暗くなり、体の力が抜け、その場にヘタヘタと坐りこんだ。妻は毎日、こんこんと眠るばかりで、極度に弱っている。一週間くらいたっても回復のきざしはみえない。食欲はなく、衰弱はつのる一方で、暗たんとした日が続いた。

が、ここで奇跡が起こった。妻が回復に向かったのである。数日後、近くにいた畠田老人が亡くなった。江上囑託には貨物廠の本部へ行つて貰うことにした。ここは米軍の砲撃が激しくて、危険きわまりないからである。

江上囑託が出て行き、残つたのは私達親子四人、武藤氏、奥村兵長の六人だけとなった。私は毎日、食料探しに出かけた。ある日、アシン川の上流に行つた時、私はここで、ほんとうの地獄を見た。急に大雨に会い、近くに建つていた大きな数棟のバラックに雨やどりした。このバラックは、日本軍の野戦病院の跡らしく、幅六メートル、奥ゆき二十メートルぐらいで、両側に床が張つてあり、真ん中が土間で通路。両側の床には何十の死体が無残にも置き去りにされており、まだ生きていたのではないかと思われる者、顔面が半分ずり落ちてゐる者、ウジが重なつてはいまわつてゐる。私はこれまでたくさんの死体に接したが、こんなむごい姿を見たのは初めてであった。病院の撤退についていけない患者をそのまま見捨てて、又は自決させたので

はなかるうかと思われた。

広い庭の斜面には、無数の白骨が散乱しており、雨が無情にも降りつづいてゐた。生き地獄とはこのことだろ。戦争の悲惨さを痛感した。

私は住み家に戻り、(あまりのショックで)妻とも口をきかず、そのまま寝こんでしまった。魂がぬけたように、一週間、ぼう然としていた。そして、奥村さんが亡くなり、マゴックには、私達家族四人と武藤さんの五人となった。たつた五人しかないこの土地に、米軍の砲撃は、山の地形を変えるほどの熾烈さだった。この頃から、長女(厚子)長男(善良)よしなが)の二人が日に日に衰弱していき、マラリヤ、栄養失調のためか、顔や体が黄色にはれあがり、下痢が続く。口はきけない。薬は何もない。施しようがない。

このとき、又奇跡が起こった。ひとりの衛生下士官が私のところに舞いこんできた。田中伍長といつたこの兵隊は本隊から離れ、さまよつていたらしい。私達が在留邦人と知つて寄つてきたと言うが、私達一家にとつては神様のお使いだった。

彼は、キニーネ、下痢どめ、ビタミン剤、栄養剤など、豊富に持っていた。弱っていた二人の子供に注射してくれ、惜しげもなく薬をくれた。

子供達は、みるみるうちに元気になった。田中伍長は数日後、私達の前を去って行った。米軍の前線へ行く、陸軍の決死切込み隊の面々が、私達の所を通るようになったので田中伍長は、彼らの目にふれるのを避けて去って行ったようだ。

マゴックは、米軍前線と日本軍陣地の中間に位置していたので、切込み隊が食料探しにもやってきた。そのつど私達の住み家に寄り、幼児二人がいることにおどろき、いろいろと話しかけてきた。中には、お守り袋を置いていく兵隊もいた。「私達はどうせ生きては日本に帰れない」と兵隊は口々に言っていた。私はなんと行っていいかわからなかった。

(はたして、無事に日本に帰っただろうか)

米軍の観測機が上空を低く飛び、しばらくして、砲弾が雨あられと飛んでくる。私がサツマ芋を背負って、住み家の近くにきた時、突然近くで迫撃砲弾が炸裂し

た。私はとっさに伏せたが、あご下の骨に強いショックを感じた。右手であご下を押さえた。痛みは感じないが、手を離せば血がふき出すのではないかと思い、じっと押さえていた。炸裂した弾が木株に当たり、それ弾となって私のあご下に当たったのだが、直接だったら、即座にお陀仏だったろう。昭和二十年八月上旬のことだった。

この頃、米軍は私達のいたマゴックまで十二キロの地点(バクタン)に強力な砲兵陣地を構築し、日本軍に総攻撃の時を狙っていた。

八月十五日、終戦。この日米軍飛行機が低空で飛来し、大量のビラを撒布した。また、拡声機が「天皇陛下の命令により、戦争は終わった」と報じた。

この日を境に、あれほど熾烈をきわめた米軍の砲爆撃は、ピタリとやんだ。

それから約一か月後の九月下旬に(私は現地召集の陸軍二等兵であり、軍籍があったため)家族を山に残したまま、軍と共に下山して、キャンガンの米軍に投降した。

米軍に投降後、武装解除をされ、PW（捕虜）とな

り、満一年後の昭和二十一年（一九四六年）九月、引揚船で名古屋港に上陸し、帰郷となったのである。

妻と二人の子供達とは、マゴックの山中で別れたが、妻子達は、在留邦人の生き残り組に合流し、総領事館日本人会と共に下山し、昭和二十年（私より一年早く）に引揚船で宇品港に上陸し、原爆投下後の広島駅から汽車で郷里福島へと向かったのである。

マゴックの山中で別れて満一年後の再会となった。

私達、この時の財産は、私がPWとして一年間、米軍キャンプで働いた給料として、日本円の三千元。これだけである。

昭和六年四月から、昭和二十一年九月まで十六年間、私は日本国のため、フィリピン国のため、血と涙と二人の子供を失った。汗と命を賭けて働いた。が結果は無残なものとなった。

いったい私の人生は何だったのだろうか。（命が助かっただけでもありがたいかもしれないが）私に残ったのは、親子四人の生命とたった現金三千元であった。

執筆者の横顔

明治四十二年、福島県野田町生まれの宍戸氏は少年の頃から海外雄飛の夢を抱いていたとき、チャンスを得てフィリッピンのマニラに渡航した。昭和六年二十二歳だった。日本人経営の水水店で働いた。働きながら言葉覚える。

フィリッピンの諸事情を知ることにつとめた。そのうち、マギヤン族が素晴らしい良質の綿花を栽培しているのを見た。フィリッピンには高級な野菜、園芸の適産地であるというひらめきが彼の脳裡に焼きついて離れない。

彼は多少農業に経験があるところから、それは適中したのである。直ちにその研究にとりかかった。研究する実行型の農士である。

十六年に日米開戦となり、十八年召集となって、芸は身をたすく、の如く、彼の特技は軍兵糧中の野菜栽培である。兵卒でありながら、ブストスの軍管理採種農場長に任命されて思う存分成果をあげて貢献できた。

フィリッピンで日本西瓜の栽培や、高級野菜が生産されたのは、彼、宍戸氏の発見である。創意工夫家でもある。

また、昭和六年以来、フィリッピンに在住していたお陰で現地人と知人多く信頼されている外に、言葉に通じたところから、日本軍は彼の長所を遺憾なく活用した。宍戸氏は又積極的に行動し、幾度か、日本軍の転進中における現地人とのトラブルを解消した。尽忠報国の行為は天晴であった。現地の岩倉大佐の激賞をうけている。

しかるに、米軍の空爆は雲霞の如く、加うるに艦砲射撃による惨憺たる戦場は、ついに敗色に向かう中で、彼は家族六人の避難行に食なく、病気に途方にくれ、一家自決せんとしたが妻の反対にあう。そのうち、二男、三男が死亡した。

八月十五日、米機から拡声器と、ピラ撒布された。拾ってみると「日本天皇は戦争は終わった」との報告である。そして砲撃はピタリ止んだ。

汗と涙と血を流し、命をかけた海外開拓者の彼、宍

戸氏は、この妻と健在な限り必ず更生を誓って、翌二十一年九月、三千円持参して名古屋に上陸した彼の人間味はたのもしいものがある。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助